

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 10 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370786

研究課題名(和文) 帝国日本における「北進論」の特質と影響：樺太と千島を例に

研究課題名(英文) Properties and influences of the northward advance theories in the Empire of Japan

研究代表者

井潤 裕 (ITANI, Hiroshi)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・境界研究共同研究員

研究者番号：10419210

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では樺太千島関連の文献資料を収集し、これらの特質を明らかにしてきた。全体的な傾向として北進論とされる言説には、「北門の鎖鑰」という言に代表される北守のための北進論、満蒙華北方面への進出をめざす<大陸北進論>、シベリア・ロシア極東への進出をめざす<征露論>に分類されることを論じた。また、個別事例として日持上人の海外布教伝説をめぐる言説群をとりあげ、近世までの蝦夷地の支配を正当化した言説が拡大再生産され、樺太や満蒙・華北地域枝の進出を支えていた実情も論じた。

研究成果の概要(英文)：This study collected hundreds of documents and articles about Karafuto and Chishima (Kuril) Islands, and revealed the properties of them. Concretely, these documents can be categorized three types below: (1) the 'northward advance' theories for the defense of northern territories, (2) the 'northward advance' theories to invade Manchuria, (3) the 'northward advance' theories to invade Siberia and Far East Russia. As the typical example, the legend of the Nichiji, who was the first Japanese visited Karafuto. The legend about him was used to justify the conquest of Hokkaido by Japanese in the premodern time. And later, his legend was also reused to justify the conquest of the east Asia and Far East Russia.

研究分野：サハリン樺太史

キーワード：北進論 樺太 千島列島

1. 研究開始当初の背景

近代日本の帝国主義的な領域拡張過程においては「南進か北進か」という議論が長く存在した。このうち、主流派となった南進論の対象であった地域に関しては、台湾や朝鮮を中心として多年にわたる研究の蓄積が存在するものの、北進論に関しては、いわゆる満州地域への進出過程のほか東亞同文會や内田良平などに言及される程度であった。

2. 研究の目的

本研究はいわゆる「北進論」を精査することで、近代日本が「北方」をどのように理解し、北方に何を求め、それをどのような活動で実現しようとしていたのかを総合的な理解することを目的とした。北進論の輪郭を明快なものとし、このイデオロギーの歴史的重要性を再考する機会を提供すること、北進論の整理によって北海道・樺太・千島といった研究蓄積の乏しい北方植民地について、その形成と発展と、その功罪を総合的に検討する視座の構築をめざした。

3. 研究の方法

本研究は「北進論」の収集整理にその主眼をおいているため、大前提として研究期間全般において関連する文献の把握収集に務めた。具体的には、北海道大学附属図書館の所蔵文献史料を中心とし、北海道立図書館・北海道立文書館・札幌市中央図書館・函館市中央図書館・釧路市立図書館・旭川市の北鎮記念館・国立国会図書館および憲政資料室・国立公文書館・外務省外交史料館・防衛省防衛研究所図書館で資料収集活動を実施した。

また、申請者が研究協力者となっている2つの共同研究、すなわち科学研究費助成基盤研究(A)「帝国日本の移動と動員」(研究代表者:今西一)、科学研究費助成基盤研究(B)「サハリン(樺太)島における戦争と境界変動の現代史」(研究代表者:原暉之)と連携して、北方史ではほとんど成果のない分野である公娼制度や、北サハリン軍事占領期(1920-25年)の司法制度、樺太・千島における日ソ戦争について、個別事例として検討を図った。

4. 研究成果

本研究では、北進論に該当しうる文献資料を樺太・千島関連のものを収集し、全体的な傾向として以下の3種に大別されることを明らかにした。「北門の鎖鑰」という言に代表される<北守のための北進論>、満蒙華北方面への進出をめざす<大陸北進論>、シベリア・ロシア極東方面への進出をめざす<征露論>である。

また、個別事例として日持上人(日蓮聖人の高弟で13世紀の人物)の海外布教伝説をめぐる言説群をとりあげ、近世における蝦夷地征服を正当化するために利用された言説が、樺太・ロシア極東・満蒙および華北地域

への進出に再利用されていた実情を論じた。

特に樺太における日蓮聖人の高弟、日持上人の伝説は、いわばその最終章として展開した物語であった。樺太における伝説の火種となったのは大陸と同様、「日持上人遺跡探求会」の調査とその成果であった。だが、起爆剤となったのは二つのモニュメント—西海岸阿幸で見つかった念仏(南無妙法蓮華經)の刻まれた大石と、豊原に建立された日持上人の銅像であった。これらは樺太の先駆者たる日持上人の存在を島民に知らしめただけでなく、伝説の信憑性を高め、多くの樺太論で言及されるきっかけをつくった。そして、多くの言説で引用が繰り返された結果、この伝説は次第に史実としての重みを増し、源義経や坂上田村麻呂などとともに、新たな北方史の「三種の神器」といふべき位置を獲得していった。樺太領有後四半世紀を迎えた1930年を画期とし、樺太ではローカル・アイデンティティとしての歴史を構築しようとする動きが活発になっていたが、日持上人はその象徴といふべき存在だった。それは北進論の系譜でいえば、第一の系譜の後継論<北方文化論>として、日本の北辺地域の歴史的プレセンスを高める役割を果たしていた。日持上人伝説の特色として、いわゆる義経チンギスハン伝説との連関性をあげることができる。この二つの伝説は明らかに相互補完的に実証されていた。すなわち、日持上人の伝説では義経の大陸遠征が証左の一つとされ、反対に義経の伝説でも日持上人の布教が裏付けとされていた。

また、研究分担者として参画した前記の共同研究「帝国日本の移動と動員」との連携を鑑み、樺太で成立発展した遊郭の実情と変遷を対象とした検討をおこない、樺太では料理屋での芸妓・酌婦による売買春営業が黙認され、内地における公娼制度の欺瞞性がさらに強まっていたことや、これが1920年にはじまる北サハリン軍事占領下で援用され、軍政下での売買春が公然化していたことをまとめ、それを正当化する言説について論じた。具体的には、(1)樺太では、占領直後から樺太民政署によって娼妓及貸座敷取締規則が公布され、公娼制度が導入されていた。同時に、料理屋・芸妓・酌婦についても、それぞれ取締規則が定められ、彼らには高額の課税と引き替えにして、売春行為が黙認された。

(2)公娼である貸座敷の認可地域は、大泊・豊原・真岡の三ヶ所に設定されていた。だが、いずれの貸座敷も一九二二年までには廃業し、娼妓は存在しなくなっていた。厳密な意味での公娼制度は、この時点で一度消滅していたのである。その代わりとして、法的には黙認された私娼にすぎない芸妓と酌婦が、あたかも公娼のような位置づけとなり、一般的にもそのように認知されていた。

(3)1920年に、取締規則の改正と樺太守備隊の再駐屯をきっかけとし、豊原における遊郭の設置が計画された。このとき、従来の料

理店による売春営業を問題視する議論が『樺太日日新聞』誌上でもなされた。しかし、結局は一部の料理屋が遊郭地へ移転するなど限定的な変化にとどまり、公娼制度をめぐる諸問題はほとんど解決されなかった。

(4) 同じ 1920 年に、北サハリンでは日本の軍事占領がはじまり、この地でも樺太「直輸入」の、料理屋・芸妓・酌婦による「公娼制度」が導入された。最盛期には料理屋 67 件・飲食店 103 件が登録され、そこでは 350 名を超える芸妓・酌婦が 1925 年の撤退に至るまで活動していた。そこでは朝鮮系・中国系・ロシア系の料理屋・酌婦も存在した。(5) 1925 年に日ソ基本条約が結ばれ、北サハリンの軍事占領は終焉を迎えると、この地で活動していた売春業者と女性たちの多くは、南部の樺太 当時、大規模製紙工場の新設で急速に市街地化が進んでいた恵須取や知取に移転していった。その結果、樺太における芸妓・酌婦の増加・拡散傾向に拍車がかかることになった。

さらに『岩波講座 ロシア革命とソ連の世紀』第 2 巻において「日ソ戦争」をテーマとした論考を執筆した。ここでは日本の北進政策が第二次世界大戦の終末に到るまで、戦略的なグランドデザインと地政学的な目的意識を欠き、対照的にそれを備えていたソ連側の軍事行動に対抗できなかったことを問題視した。すなわち、(1) ソ連軍の攻撃は、日本の敗北という千載一遇の好機を利用して、極東地域における自らの安全保障体制を確立しようとしたものであった。(2) この侵略的軍事行動に対し、日本は有効な対抗策をほぼ講じていなかった。結実するはずもないソ連との講和斡旋に時を費やし、彼らの攻撃準備に時を与えた。(3) 敗北が寸前に迫っていたにもかかわらず、関東軍は当初の計画に則って満洲国の防衛を放棄し、ソ連軍の攻勢に全力で対処しなかった。終戦の詔勅以後の大本営も、降伏プロセスに忙殺され、米軍の本土進駐を目前に控え、ソ連の攻勢への関心を保てなかった。(4) そのため、ソ連軍との苦闘を続ける関東軍と第五方面軍に対する命令や指示も適切さを欠き、特に「局地停戦交渉」という誤解の余地がありすぎる指示で混乱を助長していた。その失策の背景には、敗戦を終戦と換言したように、降伏を受容しがたい心情があった。(5) ゆえに、1945 年 5 月以降は敗北が必至となり、すでに降伏プロセスの加速が必要な時期にもかかわらず、守るべきものが何かを明確にできぬまま、事態の先延ばしをはかった。その結果、降伏の成立までに、目標を達成せんとするソ連の強引な攻勢に時間的猶予を与え、いたずらに損失を拡大していた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

井澗裕、「9 日ソ戦争」松井康治・中嶋毅編『スターリニズムという文明(ロシア革命とソ連の世紀 第 2 巻)』(2017 年 7 月刊行決定)、査読有、26p.

井澗裕、「日持上人の樺太布教説をめぐって: 帝国日本における北進論の特質と影響(1)」『境界研究』, 6 号, 査読有, 2016, pp. 81-112.

井澗裕、「地域開発と製紙産業: 樺太パルプ三国志(特集 サハリン 2)」『ARCTIC CIRCLE』, 92 号(北海道立北方民族博物館友の会), 査読有, 2014, pp. 4-9.

井澗裕、「アジテーター: 市川與一郎と物語としての尼港事件」『境界研究』, 特別号(北海道大学スラブ研究センター), 査読無, 2014, pp. 99-119.

〔学会発表〕(計 6 件)

井澗裕、稚内・北航路: サハリンへのゲートウェイ、国際貿易セミナー in 稚内(宗谷総合振興局: 北海道稚内市), 2016 年 10 月 14 日.

井澗裕、サハリンの中の日本: 国境観光の楽しみ方、サハリン(樺太)の魅力再発見セミナー(紀伊國屋札幌店: 北海道札幌市), 2016 年 2 月 20 日.

井澗裕、サハリン軍事占領と司法: ロシア連邦極東歴史公文書館所蔵資料を中心に、日本シベリア学会 第 1 回大会(北海道大学: 北海道札幌市), 2015 年 11 月 22 日.

Хирози Итани, Исторические Наследия в качестве туристических ресурсов, 8-ои симпозиум по вопросам сохранения исторических памятников периода Карафута, 2015, Южно-Сахалинск. (井澗裕、観光資源としての歴史遺産、樺太時代の歴史的記念物保存に関する第 8 回シンポジウム, ロシア連邦ユジノサハリンスク市, 2015 年 10 月 30 日)

井澗裕、北サハリン軍事占領期の亜港バクrofスカヤ教会堂をめぐって、京都大学地域研究センター共同利用・共同研究拠点プログラム公募プロジェクト「20 世紀前半のサハリン島に関する歴史的記憶」2014 年度第 2 回研究会(北海道大学: 北海道札幌市), 2015 年 2 月 16 日.

井澗裕、「(第 6 回) 亜港と尼港の旅人たち: ロシアと日本のはざまの記憶」平成 26 年度スラブ・ユーラシア研究センター公開講座「記憶の中のユーラシア」(北海道大学: 北海道札幌市), 2014 年 5 月 30 日.

〔図書〕(計 1 件)

井潤裕、岩下明裕、中川善博、刀祢館正明
『稚内・北航路:サハリンへのゲートウェイ』
北海道大学出版会, 2016 年, 59(6-13,26-33,
45-51,57-58).

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井潤 裕 (ITANI Hiroshi)

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究セン
ター・境界研究共同研究員

研究者番号: 1 0 4 1 9 2 1 0

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

()